

第132回～第182回

☆放送時間☆

期間	曜日	時間帯
昭和49年4月 8日～ 昭和50年3月24日	月	21時00分～ 21時55分

司会:加東大介 (第132回～178回、182回)
池坊保子 (第132回～141回)
河内桃子 (第142回～143回、147回～
182回)
松島トモ子 (第144回～146回)

レギュラーゲスト:ディック・ミネ(第132回～182回)

ナレーター:芥川隆行(12月31日)

☆凡例☆

- | | |
|-------------|-------|
| ①サブタイトル・放送回 | ②出演者 |
| ③曲目(歌唱者)(※) | ④放送概要 |

※出演順が判明している回は、冒頭に太字で(出演順)と記入)

昭和49年

昭和49年4月8日

- ①「唄祭り花の道中双六」 #132
- ②高田浩吉、春日八郎、都はるみ、三沢あけみ
- ③「伊豆の佐太郎」(高田)、「春日八郎」(春日)、「人生の並木路」(ディック)
- ④ 春日八郎、都はるみ、三沢あけみ、高田浩吉の出演で”花”にちなんだ歌を三部構成で送る。

今回から加東大介、池坊保子が司会を担当。池坊は華道家元・池坊専永夫人で、話題作「夫とつき合う法」の著者。また、ディック・ミネがレギュラーゲストとして豊富な体験に基づく歌謡談義を展開する。

なお、同年5月5日付読売新聞東京版朝刊には、「司会者選び慎重に」とのタイトルで、28歳主婦の以下の投書が紹介されている。

NETテレビ「にっぽんの歌」の月曜日の司会者、池坊保子さんは、どうも司会者には不適格だと思う。司会者選びは、単に有名人だから、というのではいけない。

昭和49年4月15日

- ①「勝負！演歌対艶歌」 #133
- ②水前寺清子、五木ひろし、八代亜紀、西来路ひろみ、桜井敏雄
- ③「忠治子守唄」(水前寺)、「名月赤城山」(五木)、「金色夜叉」(桜井)、「籠の鳥」(桜井)
- ④ 水前寺清子、五木ひろし、八代亜紀、西来路ひろみと、いずれも演歌一筋の顔ぶれに加え、流し生活五十年という演歌師・桜井敏雄を迎え、演歌または艶歌を解剖する。

第一部は“勝負！演歌対艶歌”で、五木の「名月赤城山」、水前寺の「忠治子守唄」と演歌のスタンダードが聴ける。

第二部は“明治大正演歌特集”。バイオリン片手に流し生活五十年の桜井が登場。得意の曲「金色夜叉」「籠の鳥」を披露。

第三部は“ディック・ミネの歌謡こぼれ話”。

昭和49年4月22日

- ①「ああ思い出の抒情演歌」 #134
- ②ちあきなおみ、菅原洋一、藤島桓夫、三浦洸一、岡本敦郎
- ③「誰か故郷を想わざる」(ちあき)、「湖畔の宿」(菅原)、「南の島に雪が降る(替え歌)」(加東)、「マノクワリ(「ラバウル小唄」の替え歌)」(加東)、「踊子」(不明)、「あざみの歌」(不明)
- ④ ”紅一点”のちあきなおみを囲んで菅原洋一、藤島桓夫、三浦洸一、岡本敦郎らが出演、戦前戦後の抒情演歌を特集する。

第一部は“ああ思い出の抒情演歌”で、ちあきが「誰か故郷を想わざる」、菅原が「湖畔の宿」、岡本が「白い花の咲く頃」など日本人特有のセンチメンタリズムを歌い、これらのメロディーについて出演者一同が思い出や感想を語り合う。

第二部“ディック・ミネ歌謡談義”は、昭和初期に隆盛をきわめたダンスホールの思い出話や現在のファッションとそっくりの当時のモボ・モガ風俗などが紹介される。

他にレギュラーのディック・ミネのデビュー秘話や、司会の加東大介が「南の島に雪が降る」の替

え歌や、「ラバウル小唄」の替え歌で「マノクワリ」を歌い、兵隊時代にいた南の島マノクワリを偲ぶ。

昭和49年4月29日

- ①「演歌・男の花道」 #135
- ②三橋美智也、村田英雄、都はるみ、三善英史、鶴岡雅義と東京ロマンチカ
- ③「ああ田原坂」(三橋)、「侍ニッポン」(村田)、「白虎隊」(三善)
- ④ 演歌のベテラン三橋美智也、村田英雄、都はるみに加え、モダン演歌とも言うべき三善英史、鶴岡雅義と東京ロマンチカから演歌の数々を披露する。
第一部では、三橋が「ああ田原坂」、村田が「侍ニッポン」、三善が「白虎隊」などを歌う。

昭和49年5月6日

- ①「競演！夜の恋唄なみだ唄」 #136
- ②霧島昇、天知茂、松尾和子、青江三奈、渚ゆう子
- ③不明
- ④ 大ベテラン霧島昇を特別ゲストに、戦前の映画主題歌と、それにまつわるエピソードを紹介する。
また、この番組三回目の出演になる天知茂が、ディック・ミネ、松尾和子、青江三奈と、それぞれデュエットを披露するのが見もの。

昭和49年5月13日

- ①「慕情・ふるさとの詩」 #137
- ②倍賞千恵子、春日八郎、フランク永井、由紀さおり、克美茂
- ③「下町の太陽」(倍賞)、「あん時やどしゃ降り」(春日)、「大阪ぐらし」(フランク)
- ④ 倍賞千恵子、由紀さおり、春日八郎、フランク永井、克美茂らを迎え、ふるさとにちなんだ歌とブルースを特集する。
第一部“慕情・ふるさとの詩”では、倍賞が「下町の太陽」、フランクが「大阪ぐらし」、春日が「あん時やどしゃ振り」などを歌い、合間にそれぞれ故郷の思い出を語る。
第二部では、ディック・ミネがブルースについて話し、フランクや由紀がブルースのヒット曲を披露する。

昭和49年5月20日

- ①「艶歌・盛り場仁義」 #138
- ②森進一、北島三郎、ちあきなおみ、藤圭子
- ③「旅姿三人男」(森・北島・ディック)
- ④ 森進一、北島三郎、ディック・ミネが競演する「旅姿三人男」を始め、戦前・戦後の演歌のヒット曲を特集する。

昭和49年

ディック・ミネは「いい歌はすぐれた歌手が次々に歌いついで行ってこそ生き続けるのだ」と歌謡哲学を披露。

昭和49年5月27日

- ①「石原裕次郎ビッグヒットに挑戦！」 #139
- ②淡谷のり子、菊池章子、二葉あき子、八代亜紀、石原裕次郎
- ③「小さな竹の橋の下で」(石原・ディック)、「雨のブルース」(不明)、「星の流れに」(不明)、「フランチェスカの鐘」(不明)、「赤いハンカチ」(不明)
- ④ 石原裕次郎、菊池章子、二葉あき子、八代亜紀、それに特別ゲストの淡谷のり子を加えたメンバーの出演で、戦前戦後の名曲といわれた歌を歌う。
第一部は“石原裕次郎ビッグヒットに挑戦!”で、石原が昭和22、23年ごろのヒット曲を菊池、二葉らと競演する。
第二部“ディック・ミネ歌謡談義”は、“ブルースの女王”淡谷の歌と恋と人生を分析する。
他に、淡谷、菊池、二葉らが、昭和40年代のヒット曲を歌ったり、菊池らが戦争中の苦労話を披露する。

昭和49年6月3日

- ①「ああ、思い出のロマン歌謡」 #140
- ②灰田勝彦、青江三奈、菅原洋一、ペギー葉山、森山良子
- ③「燦めく星座」(灰田)、「新雪」(灰田)、「紫のタンゴ」(青江・菅原)、「鈴懸の径」(ペギー)、「森の小径」(森山良子)
- ④ “ああ、思い出のロマン歌謡”と題して、暗い戦争の谷間で若者たちに愛唱されたロマンチックな名曲の数々を特集する。出演は戦前派の大ベテラン灰田勝彦を始め、ペギー葉山、菅原洋一、青江三奈、森山良子ほか。
灰田が「燦めく星座」と映画主題歌「新雪」を、森山が「森の小径」、青江・菅原が「紫のタンゴ」、ペギーが「鈴懸の径」を歌う。
他に灰田が軍歌を披露する。
“ディック・ミネ歌謡談義”は、昭和9年頃から盛んに日本に入ってきた外国の曲について解説する。

昭和49年6月10日

- ①「これが演歌だ!!」 #141
- ②北島三郎、水前寺清子、田端義夫、島倉千代子
- ③「男の純情」(北島・水前寺・田端)、「妻恋道中」(北島)、「盃」(不明)、「どうどうどっこの唄」(不明)、「大根月夜」(不明)、「哀愁のからまつ林」(不明)
- ④ 北島三郎、水前寺清子、島倉千代子、それに戦前派のベテラン田端義夫を加えたメンバーで、昭和10年代からの演歌を特集する。

芥川隆行のナレーションをはじめ、三味線、尺八、影絵とさまざまな趣向を凝らして演歌のムードを盛り上げる。

“ディック・ミネ歌謡談義”は、ディック・ミネが演歌とは何か、演歌の魅力はどこにあるのか、など独自の演歌論を展開する。

曲目は「男の純情」を、北島、水前寺、田端の順で一番から三番まで競演するほか、「どうどうどっこの唄」「大利根月夜」ほか。

昭和49年6月17日

- ①「哀調切々…波止場旅情」 #142
- ②都はるみ、三橋美智也、三沢あけみ、山田太郎、松山恵子
- ③「津軽じょんがら節」（三橋）、「涙の連絡船」（不明）、「あの娘が泣いてる波止場」（不明）、「港シャンソン」（不明）、「未練の波止場」（不明）
- ④ 三橋美智也、都はるみ、三沢あけみ、山田太郎、松山恵子の顔ぶれで、波止場や船にちなんだ歌を送る。

三橋が三味線修行当時の苦労話を語った後、マンボ風アレンジした青森民謡「津軽じょんがら節」をバンドと合奏するのがみもの。

なお、この回から女性司会者が河内桃子に交代した。同年6月15日付読売新聞東京版夕刊では以下のように紹介されている。

NETテレビ系「にっぽんの歌」では、十七日から女性司会者が池坊保子から河内桃子に交代する。

河内の歌番組司会はこれが初めて。収録のスタジオで「ナマの歌を聞けるなんて感激です」という。服装は黒地に白の水玉模様のあっさりとしたワンピース。これは「歌手の方が主役の番組。ステージ衣装がひきたつように」とベテランらしい配慮だ。

河内は「芝居の時とちがって、作らないナマの人間の部分を出していくところが司会者にとって大切なのでしょね。私も素顔を出します」と語っている。

また、同年6月17日付毎日新聞東京版夕刊においても、「歌はむかしから大好き。芝居と違い、つぐらない自然のままの私でやっていきます」との意気込みが紹介されている。

昭和49年6月24日

- ①「演歌！男の涙・女の涙」 #143
- ②村田英雄、扇ひろ子、いしだあゆみ、由紀さおり、大月みやこ
- ③「無法松の一生」（村田）、「新宿ブルース」（扇）、「緋牡丹ブルース」（扇）
- ④ 今夜は、村田英雄、いしだあゆみ、由紀さおり、扇ひろ子、大月みやこの顔ぶれで送る。

“演歌！男の涙・女の涙”で、まず村田がおなじみ「王将」の魅力について司会の加東大介と語り合う。次いで、村田が5月に新宿コマ劇場で演じた“無法松の一生”の舞台を再現、主題曲「無法松の一生」をセリフと勇壮な祇園太鼓を打ち鳴らしながら歌うのがみどころ。辰巳柳太郎から伝授されたという、あざやかなバチさばきである。

そのあと、ハワイ永住をとりやめ2年ぶりに歌謡界にカムバックした扇ひろ子が登場。ハワイでの苦しい体験談や復帰の心境などを語り、新曲「緋牡丹ブルース」を披露する。

昭和49年

昭和49年7月1日

- ①「競演！艶歌の祭典」 #144
- ②春日八郎、三橋美智也、都はるみ、青江三奈、ぴんから兄弟
- ③「赤いランプの終列車」(春日)、「女のみち船頭唄」(三橋)、「アンコ椿は恋の花」(都)、「恍惚のブルース」(青江)、「女のみち」(ぴんから兄弟)、「ダイナ」(ディック)
- ④ 初めてスタジオを離れ、愛知県勤労会館から録画中継で。また、舞台公演のため司会を休む河内桃子の代役として、松島トモ子が登場。出演は春日八郎、三橋美智也、都はるみ、青江三奈、ぴんから兄弟。

第一部は出演歌手のデビュー曲と、ふるさとを歌った曲を特集する。曲は「アンコ椿は恋の花」「女のみち」「恍惚のブルース」「おんな船頭唄」「赤いランプの終列車」。当時の思い出も語る。

続く“ミネ・コーナー”は、ディック・ミネが40年前のデビュー曲「ダイナ」を歌い、吹き込み風景など珍しい話を披露。

昭和49年7月8日

- ①「あの日あの歌光のステージ」 #145
- ②水原弘、水前寺清子、美川憲一、伊東ゆかり、藤山一郎
- ③ **(出演順)**「黒い花びら」(水原)、「涙を抱いた渡り鳥」(水前寺)、「柳ヶ瀬ブルース」(美川)、「小指の思い出」(伊東)、「なつかしの歌声」(藤山)、「上海ブルース」(水前寺・ディック)、「上海の街角で」(水原)、「上海の花売娘」(水前寺)、「上海リル」(ディック・水原)、「長崎の鐘」(藤山)、「酒は涙か溜息か」(伊東、美川、藤山)、「東京ラブソディ」(藤山)、「人生ブルース」(水前寺)、「ナナという女」(美川)、「季節風」(伊東)、「港はまだ遠い」(水原)
- ④ 水原弘、水前寺清子、美川憲一、伊東ゆかり、それに特別ゲストの藤山一郎を加えたメンバーで、戦前戦後のヒット曲を特集する。

”ディック・ミネ歌謡談義”は、歌謡曲のひとつのジャンルにもなった”上海もの”の特集。曲目は、水前寺、ディック・ミネが「上海ブルース」、水原が「上海の街角で」、水前寺が「上海の花売娘」、ディック、水原で「上海リル」。

ゲストの藤山の東京銀座の回顧話もある。

また、藤山とディックが、古き良き時代の思い出話をする。

司会は先週に引き続き松島トモ子が務める。

昭和49年7月15日

- ①「歌絵巻花の競艶」 #146
- ②三波春夫、朝丘雪路、ちあきなおみ、藤圭子
- ③ **(出演順)**「チャンチキおけさ」(三波)、「祇園小唄」(ちあき)、「明治一代女」(藤)、「すみだ川」(朝丘)、「雪の渡り鳥」(三波)、「名月赤城山」(三波)、「忠太郎月夜」(三波)、「二人は若い」(ディック・朝丘・ちあき)、「忘れちゃいやよ」(ちあき)、「ああそれなのに」(朝丘)、「望郷の唄」(ディック)、「私は京都へ帰ります」(藤)、「円舞曲」(ちあき)、「ごめんなさい」(朝丘)、「笠飛び峠」(三波)
- ④ 司会は先々週、先週に引き続き松島トモ子が務める。

昭和49年7月22日

- ①「郷愁のうた愛の詩集」 #147
- ②石原裕次郎、青江三奈、松尾和子、淡谷のり子、不明
- ③「ポエマ」(淡谷)、「雨の夜は」(淡谷)、「港が見える丘」(不明)、「グッド・ナイト」(不明)、「別れのブルース」(不明)、「俺は待ってるぜ」(不明)、「人の気も知らないで」(不明)
- ④ 石原裕次郎をメインゲストに迎え、松尾和子、青江三奈、淡谷のり子とのデュエットで、戦前戦後のヒット曲を送る。クラブ出身の松尾、青江が石原とからんで大人のムードで送る。
- 他に、淡谷が昔なつかしいシャンソン・メドレーを披露し、故藤田嗣治画伯の思い出や、シャンソン草創期のエピソードを語る。
- 曲は「グッド・ナイト」「別れのブルース」「俺は待ってるぜ」の他、故藤田嗣治画伯が淡谷のために訳詞したという「雨の夜は」も登場。淡谷は「雨の夜は」をしみじみと歌う。

昭和49年7月29日

- ①「真髓！演歌の心」 #148
- ②五木ひろし、田端義夫、島倉千代子、フランク永井
- ③不明
- ④詳細不明

昭和49年8月5日

- ①「演歌！望郷の詩男の唄」 #149
- ②春日八郎、村田英雄、都はるみ、倍賞千恵子、三田明
- ③「誰か故郷を想わざる」(都)、「お月さん今晚は」(春日)、「山の吊り橋」(春日)、「あざみの歌」(倍賞)、「湖底の故郷」(三田)、「人生劇場」(春日・村田・ディック)、
- ④ 今夜は、春日八郎、村田英雄、都はるみ、倍賞千恵子、三田明の顔ぶれでふるさと演歌、任侠演歌の数々を送る。また、曲の合間にはふるさとの思い出や、曲のエピソードを語る。倍賞は、LP「日本の歌」の第四集を出したところ。

春日、村田、ディック・ミネの豪華トリオによる「人生劇場」などが見もの。

第一部は“演歌！望郷の詩男の唄”で、旧盆帰省のシーズンにちなんでふるさとをしのぶ歌を特集。曲目は、都が「誰か故郷を想わざる」、春日が「お月さん今晚は」と「山の吊り橋」、倍賞が「あざみの歌」、三田が「湖底の故郷」など。

なお、同年8月12日付読売新聞東京版朝刊に、「ほめ合うのも程々に」とのタイトルで、47歳の男性視聴者からの以下の投書が掲載されている。

先日のNET「につぼんの歌」(月曜後9・00)で、ディック・ミネと村田英雄が、盛んに相手をほめ合っていた。これは美しいことであるはずなのに、度が過ぎると耳ざわりになる。最近、古い人と中堅が組むとよくみられる情景である。

昭和49年

昭和49年8月12日

- ①「150回記念特集・勢揃い！紅白歌祭り（前編）」 #150
- ②霧島昇、渡辺はま子、藤山一郎、市丸、近江俊郎、織井茂子、岡本敦郎、菊池章子、三浦洸一、奈良光枝、菅原洋一、ぴんから兄弟、ちあきなおみ、由紀さおり、高島忠夫
- ③不明
- ④ 今週と来週の2回にわたり、本番組150回を記念して、豪華メンバーによる紅白歌祭りを送る。番組はパーティー形式で進行、男女14人ずつ計28人が紅白に分かれてヒット曲を歌い、思い出話や近況を語り合う。また、前司会者の高島忠夫が特別ゲストとして本職歌手に混じって歌を披露するのが話題。

昭和49年8月19日

- ①「150回記念特集・勢揃い！紅白歌祭り（後編）」 #151
- ②渡辺はま子、藤山一郎、奈良光枝、岡本敦郎、菅原洋一、ペギー葉山、菊池章子、榎本美佐江、ぴんから兄弟、由紀さおり、高島忠夫
- ③不明
- ④ 先週に引き続いて、紅白に分かれた出演者30人が、それぞれの代表的ヒット曲を歌う。今回は、交通事故で入院していた菊池章子が事故以来はじめて歌声を聴かせるほか、特別ゲストの高島忠夫がディック・ミネのものまねを軽妙に演じる。

昭和49年8月26日

- ①「こまどり姉妹涙のカムバック！」 #152
- ②こまどり姉妹、三橋美智也、都はるみ、青江三奈、遠藤実
- ③不明
- ④ こまどり姉妹、三橋美智也、都はるみ、青江三奈、それに特別ゲストの作曲家遠藤実を迎えて、数々のヒット曲を特集する。
妹葉子の重病を乗り越えて、4年ぶりにカムバックしたこまどり姉妹の苦難や、再起の抱負を伝える。また、そのこまどり姉妹の歌や、”大正演歌”特集で松井須磨子の「ゴンドラの唄」のレコード紹介など、庶民の悲しみをこめた演歌を披露する。
また、こまどり姉妹の再起を祝福して遠藤が自作の詩を朗読。

昭和49年9月2日

- ①「艶くらべ夜の花街ネオン街」 #153
- ②高田浩吉、三浦布美子、由紀さおり、バープ佐竹、伊東ゆかり、黒沢明とロス・プリモス
- ③「大江戸出世小唄」（高田）
- ④ ディック・ミネが戦前の花街と戦後のネオン街の違いにガクを示せば、高田浩吉も40年前の「大江戸出世小唄」を艶やかに歌う。

昭和49年9月9日

- ①「望郷・我が心のうた」 #154
- ②霧島昇、春日八郎、島倉千代子、内山田洋とクール・ファイブ、西来路ひろみ
- ③「アイルランドの娘」(ディック)、「月光価千金」(ディック)
- ④ 霧島昇、春日八郎、島倉千代子のベテラン3人に、内山田洋とクール・ファイブ、西来路ひろみを加え、ふるさとを偲ぶ歌を特集。

また、ディック・ミネが、昭和10年前後に大ヒットした「アイルランドの娘」「月光価千金」などを披露する。ディックは、今夜は”若き日のジャズ”をたっぷり聴かせるとあって大ハッスル。ところが、この本当の秘密は、同番組が3か月遅れでアメリカで放送されており、在米の子どもたちや孫が楽しみにしているため。先日も「子どもが、おじいちゃん出ているよ、と大はしゃぎだったワ」と長女から国際電話があったそうで、”青年歌手”を自負する彼も、孫には弱い、とはスタッフの声。

昭和49年9月16日

- ①「花の演歌大競演！」 #155
- ②美空ひばり、北島三郎、五木ひろし
- ③不明
- ④詳細不明

昭和49年9月23日

- ①「再起！舟木一夫我が心の歌」 #156
- ②舟木一夫、ちあきなおみ、都はるみ、三沢あけみ、丘灯至夫、市川昭介
- ③「高校三年生」(舟木)、「学園広場」(舟木)
- ④ このほどカムバックした舟木一夫が登場、デビュー曲「高校三年生」「学園広場」などのヒット曲を歌うほか、都はるみ、ちあきなおみ、三沢あけみが”さすらい”をテーマにした曲を歌う。

また、舟木の歌を数多く手がけている作詞家丘灯至夫、作曲家市川昭介の両氏が特別出演、舟木にはなむけの言葉を贈る。

昭和49年9月30日

- ①「高峰三枝子郷愁の詩愛の詩」 #157
- ②高峰三枝子、春日八郎、由紀さおり、ダーク・ダックス
- ③「湖畔の宿」(不明)、「高原の旅愁」(不明)、「懐しのブルース」(不明)、「別れのタンゴ」(不明)
- ④ 高峰三枝子を特別ゲストに、「郷愁の詩・愛の詩」「戦後の映画主題歌集」を特集する。
曲は、「湖畔の宿」「高原の旅愁」「懐しのブルース」「別れのタンゴ」ほか。

昭和49年

昭和49年10月7日

①「真髓・ど根性演歌」 #158

②村田英雄、こまどり姉妹、一節太郎、ぴんから兄弟、畠山みどり

③「夢がふたたびもどるまで」(こまどり)

④ 村田英雄、こまどり姉妹、ぴんから兄弟、畠山みどりらが出演、“ど根性演歌”を歌いまくる。

先日この番組でカムバック第一声を放ったこまどり姉妹が、妹が作詞、姉が作曲した新曲「夢がふたたびもどるまで」を初公開する。

昭和49年10月14日

①「競演！不滅の歌謡名作集」 #159

②石原裕次郎、水前寺清子、ちあきなおみ、島倉千代子

③「裏町人生」(石原・水前寺)、「恋の曼珠沙華」(石原)・ちあき、「胸の振子」(石原・島倉)

④ 石原裕次郎を囲む三人の女性歌手という趣向で、島倉千代子、水前寺清子、ちあきなおみが出演、それぞれが石原と絡んで歌謡曲の名曲を歌う。水前寺とは「裏町人生」、ちあきとは「恋の曼珠沙華」、島倉とは「胸の振子」。

他に東海林太郎メロディー特集。

昭和49年10月21日

①「恋と涙のロマン艶歌」 #160

②天知茂、藤山一郎、中条きよし、松尾和子、八代亜紀

③「東京行進曲」(松尾・中条・八代・天知)、「銀座ブルース」(天知・松尾)「夢淡き東京」(不明)、「新宿ブルース」(不明)

④ 特別ゲストの藤山一郎を中心に、最近LPを出して本格的に”歌うスター”の仲間入りをした天知茂、今年の当たり屋・中条きよし、八代亜紀、そして高校生・大学生に人気のある夜のムード歌手松尾和子を迎えて、都会調演歌を特集する。

第一部は、松尾、中条、八代、天知が一番から四番まで歌う「東京行進曲」をはじめとして、赤坂、新宿、銀座など盛り場を歌ったヒット曲を紹介する。

第二部は“藤山一郎コーナー”。デビュー時代を歌う。

昭和49年10月28日

①「熱唱！バタヤン涙の人生」 #161

②田端義夫、都はるみ、青江三奈、フランク永井

③「無情の夢」(田端)、「山は夕焼」(田端)、「浜千鳥」(田端)、「夢のゆりかご」(田端)

④ 田端義夫、都はるみ、青江三奈、フランク永井の顔ぶれで、なつかしいヒット曲を歌う。

第二部“田端義夫コーナー”では、田端が母や兄弟の思い出を語るとともに、幼時に父を亡くし、十人兄弟の苦しい生活の中、歌った愛唱歌を絶唱する。曲は、「無情の夢」「山は夕焼」「浜千鳥」「夢のゆりかご」。特に、一番かわいがってくれた姉が芸者に売られてゆく時、二人で歌ったという「浜千

鳥」には、本人はもとより司会の加東大介、河内桃子も思わず涙した。

昭和49年11月4日

- ①「大勝負！花の武士道」 #162
- ②水前寺清子、五木ひろし、藤圭子、村田英雄、西川峰子
- ③「涙を抱いた渡り鳥」（水前寺）、「雪の渡り鳥」（五木）、「お島千太郎旅唄」（村田）
- ④ 五木ひろし、水前寺清子、村田英雄、藤圭子、それに、このほど新宿音楽祭で金賞を獲得した西川峰子を迎える。

第一部は”渡り鳥人生”を歌った「演歌の特集」。水前寺が「涙を抱いた渡り鳥」、五木が「雪の渡り鳥」、村田が「お島千太郎旅唄」ほかを歌う。

第二部は、村田と水前寺の顔合わせ。九州出身の二人が、九州男児、九州おんなの特質を語り合う。

“ディック・ミネ歌謡談義”は、家庭や母親を歌った曲の特集。

昭和49年11月11日

- ①「忘れじの歌・女の哀愁」 #163
- ②淡谷のり子、二葉あき子、菊池章子、松山恵子、菅原都々子、藤本二三代、不明
- ③「星の流れに」（菊池）、「月がとっても青いから」（菅原）、「十九の浮草」（松山）、「祇園小唄」（藤本）、「カスバの女」（不明）、「別れのブルース」（淡谷・ディック）、「古き花園」（二葉）、「君忘れじのブルース」（淡谷）
- ④ 戦前から戦後にかけて活躍し、なお健在な女性歌手により、思い出の名曲を聞く。

第一部は、菊池章子が「星の流れに」を、菅原都々子が「月がとっても青いから」を、藤本二三代が「祇園小唄」、松山恵子が「十九の浮草」を歌う。

“ディック・ミネ歌謡談義”は、ディック・ミネと淡谷のり子が一緒に「別れのブルース」を歌った後、二葉あき子を交え、古き良き時代の歌手生活を偲ぶ。

さらに二葉が「古き花園」を、淡谷が「君忘れじのブルース」を歌うなど、思い出の曲が披露される。

昭和49年11月18日

- ①「忘れじの歌・男の涙」 #164
- ②小畑実、藤島桓夫、三浦洗一、三船浩、若山彰、城卓矢、北原謙二
- ③「勘太郎月夜唄」（小畑）、「月の法善寺横町」（藤島）、「落葉しぐれ」（三浦）、「男のブルース」（三船）、「喜びも悲しみも幾歳月」（若山）、「骨まで愛して」（城）、「旅姿三人男」（ディック・城・北原）
- ④ 先週の「忘れじの歌・女性歌手編」に続き、「男性編」を。出演は小畑実、藤島桓夫、三浦洗一、三船浩、若山彰、城卓矢、北原謙二。それぞれなつかしいヒット曲の他、持ち歌以外の好きな歌を歌うのが見どころ。

小畑の「勘太郎月夜唄」で幕開け、藤島の「月の法善寺横町」。三浦の「落葉しぐれ」と続く。また、低音ブームのはしりともいえる三船は「男のブルース」を、若山は映画主題歌「喜びも悲しみも幾年

昭和49年

月」。

“歌謡談義”に城、北原が登場する。城は元ウエスタン歌手、北原は元ロカビリー歌手だけに、ジャズ畑の大先輩のディック・ミネの提案で、ポップス調に編曲した「旅姿三人男」を三人で楽しく歌う。

同年12月7日付読売新聞東京版朝刊に「態度疑う城卓也」と題する以下の視聴者からの投書が掲載されているが、同様の投書が3通届いたとのこと。

NETテレビ「にっぽんの歌」(月曜後9・00)に出た城卓也の態度はなんですか。彼の唯一のヒット曲「骨まで愛して」を、レコードを流して口をぱくぱくさせるとは——。しかも口と歌詞が合わず、何のためにテレビに出たのでしょうか。

昭和49年11月25日

- ①「演歌！愛と涙の遠藤メロディー」 #165
- ②舟木一夫、こまどり姉妹、三田明、ペギー葉山、遠藤実
- ③「未練ごころ」(こまどり)、「花咲く乙女たち」(舟木)、「上海ブルース」(三田)
- ④ 舟木一夫、こまどり姉妹、三田明、ペギー葉山、それに特別ゲストとして作曲家の遠藤実を迎える。

第二部は「演歌！愛と涙の遠藤メロディー」。遠藤の指揮で、こまどりが「未練ごころ」、舟木が「花咲く乙女たち」を歌った後、遠藤の門下生でもある舟木とこまどりから見た遠藤のプロフィールや、師から見たこまどり、舟木の素顔、流しから今日の地位を築いた遠藤の人生観、ヒット曲作りの秘密、下積み時代の苦労などを話す。また、舟木とこまどりは、歌手としての遠藤とデュエットする。

“ディック・ミネ歌謡談義”は、三田がディックのヒット曲「上海ブルース」を物まねで披露、“本家”をびっくりさせる。

ほかに“別れ”をテーマにした曲を特集する。

昭和49年12月2日

- ①「艶歌！港、マドロス、なみだ唄」 #166
- ②植木等、都はるみ、春日八郎、ちあきなおみ、野村真樹、阿部徳二郎
- ③「スーダラ節」(植木)、「ハイそれまでよ」(植木)
- ④ すっかりドラマづいて歌にご無沙汰している植木等が久しぶりの歌番組出演。昭和36年に爆発的な人気を呼んだ「スーダラ節」の名調子を身振り手振りで聞かせる。

昭和49年12月9日

- ①「男なみだのアキラ節」 #167
- ②小林旭、水前寺清子、伊東ゆかり、園まり、灰田勝彦
- ③「ギターを持った渡り鳥」(小林)、「男なら」(小林)、「唐獅子牡丹」(小林)、「北帰行」(小林)、「恋すすき」(小林)、「男でよいしょ」(水前寺)、「島原地方の子守唄」(水前寺)、「琵琶湖周航の歌」(伊東)、「面影のワルツ」(園)、「新雪」(全員)
- ④ 小林旭、水前寺清子、伊東ゆかり、園まり、灰田勝彦の顔ぶれで。

小林が、かつて大ヒットした日活映画「渡り鳥シリーズ」のテーマ曲「ギターを持った渡り鳥」ほかの”アキラ節”を高音で披露。

また、水前寺が「島原地方の子守唄」、伊東が「琵琶湖周航の歌」など、”ふるさとの歌”を特集。

同日付朝日新聞東京版朝刊には、「今夜の『男なみだのアキラ節』の構成はまとまりが不足。灰田と小林をどう結びつけるか、といった配慮があつていいはず。時間のある歌手を集めてつなげるだけでは能がない。」との記者からの番組に対する意見が掲載されている。

昭和49年12月16日

①「艶歌！わが故郷に涙して」 #168

②五木ひろし、小柳ルミ子、青江三奈、東京ロマンチカ、田端義夫

③「瀬戸の花嫁」(不明)、「知床旅情」(小柳)、「長崎ブルース」(青江)、「かえり船」(田端)、「誰か故郷を想わざる」(五木)、「湖畔の宿」(青江)

④ 五木ひろし、青江三奈、東京ロマンチカに、初出演の小柳ルミ子、特別ゲストの田端義夫を迎えた顔ぶれで、ご当地ソング、ふるさとの歌を特集する。

第一部はご当地ソングの特集。曲目は「瀬戸の花嫁」「知床旅情」「長崎ブルース」ほか。

第二部は、先日この番組で、貧しかった少年時代を語り、優しくした姉にまつわる悲しい思い出とともに、少年時代の愛唱歌を絶唱した田端義夫が登場。「あの放送をみて感動しました」という投書が殺到したが、その中から、小樽に住む主婦・渡辺恒子さんの引き揚げ者の苦しきをつづった手紙を紹介。渡辺さんのリクエストにこたえて、田端が歌う「かえり船」が涙を誘う。他に五木が「誰か故郷を想わざる」、青江が「湖畔の宿」をそれぞれ熱唱する。

“ディック・ミネ歌謡談義”は、古賀政男メロディーを特集。

昭和49年12月23日

①「宴歌・夜の恋街なさけ街」 #169

②都はるみ、ちあきなおみ、三条正人、三橋美智也、江利チエミ

③「船頭可愛や」(江利)、「ひえつき節」(江利・三橋)、「さのさ」(江利・三橋)、「私の青空」(江利・ディック)「ゲイシャ・ワルツ」(都)、「まつの木小唄」(三条)、「お座敷小唄」(ちあき)

④ 忘年会の季節だが、久しぶりに江利チエミ、三橋美智也、都はるみ、ちあきなおみ、三条正人の顔ぶれで、お座敷やバーなど宴席での愛唱歌を特集する。

江利は「船頭可愛や」などの独唱の他、三橋と民謡「ひえつき節」や得意の「さのさ」を、レギュラーのディック・ミネと「私の青空」をデュエットで歌うなど、活躍する。都は「ゲイシャ・ワルツ」ほかを、三条が「まつの木小唄」、それに、ちあきが「お座敷小唄」を歌う。

昭和49～50年

昭和49年12月30日

- ①「夢の紅白大合戦！」 #170
- ②春日八郎、都はるみ、村田英雄、青江三奈、舟木一夫、松尾和子、美川憲一、こまどり姉妹、三橋美智也、畠山みどり
- ③「王将」(村田)、「三味線姉妹」(こまどり)、「柳ヶ瀬ブルース」(美川)、「恋は神代の昔から」(畠山)、「好きになった人」(都)
- ④ スタジオからの生放送で、ベテラン歌手のなつかしのヒット曲を味わう。男性五人と一組、女性七人が紅白に分かれ、パーティー形式で交互に歌い、合間に司会の加東大介、河内桃子、ディック・ミネが軽妙なやりとりを見せる。

昭和49年12月31日

- ①「さよなら'74につぼんの歌大全集・美空ひばりオン・ステージ」
- ②美空ひばり、北島三郎、都はるみ、金田正一、長門裕之
- ③不明
- ④ 美空ひばりのヒット曲を中心に、美空が戦前戦後の”につぼんの歌”のベスト曲34曲を歌いまくる。新宿コマ劇場からの生中継。
ナレーターは芥川隆行。
なお、NETテレビ(昭和52年からはテレビ朝日)系列局では、昭和52年まで大晦日の夜に美空ひばりのワンマンショーを放送していたが、タイトルに「につぼんの歌」を冠したのはこの回のみである。
この回を放送回にカウントすると、昭和50年12月29日放送分「特集!200回記念・歌まつり花の饗宴」が#200にならないため、カウントしないのが正しいものと推測した。

昭和50年1月6日

- ①「競演!晴れ姿・花の三人衆」 #171
- ②三波春夫、北島三郎、都はるみ
- ③「紀伊国屋文左衛門」(三波)
- ④ 三波春夫、北島三郎、都はるみの顔ぶれで、演歌を特集する。
第一部は、股旅もの特集。
第二部は、三波がお得意の長編歌謡曲「紀伊国屋文左衛門」を浪曲入りで熱演する。
第三部はふるさと特集。

昭和50年1月13日

- ①「遠藤実・涙の人生演歌」 #172
- ②田端義夫、春日八郎、ちあきなおみ、遠藤実
- ③「ふるさとの丘」(田端)、「出世船」(田端)、「お月さん今晚は」(春日)、「別れの一本杉」(春日)、「星影のワルツ」(ちあき)、「カスバの女」(ちあき)、「別れ船」(遠藤)、「裏町人生」(遠藤)

- ④ 田端義夫、春日八郎、ちあきなおみと、スペシャル・ゲストの作曲家・遠藤実を迎えて送る。
遠藤が、流しの演歌師から売れっ子作曲家になるまでの苦闘の半生を、ヒット曲を交えてつづるのが話題。また、同氏の流し時代の同僚をはじめ、現役の流しなど十数人が登場する。

昭和50年1月20日

- ① 「艶歌！哀愁の恋唄」 # 173
② 水前寺清子、水原弘、島倉千代子、笹みどり、近江俊郎
③ 「艶歌」(水前寺)、「男の純情」(水前寺)、「ゴンドラの唄」(水原弘)、「天国に結ぶ恋」(笹みどり)、「愛のさざ波」(島倉千代子)、「別れの磯千鳥」(近江俊郎)、「誰か夢なき」(近江・水前寺)、「愛の灯影」(近江・笹)、「悲しき竹笛」(近江・島倉)、「或る雨の午後」(ディック・水原)
④ 島倉千代子、水前寺清子、水原弘、笹みどりらベテラン歌手を迎え、演歌ならぬ”艶歌”の数々を歌う。

水前寺が「艶歌」(昭和43年)と「男の純情」(昭和11年)、水原が「ゴンドラの唄」(大正5年)、笹が「天国に結ぶ恋」(昭和7年)、島倉が「愛のさざ波」(昭和43年)、特別ゲストの近江俊郎が「別れの磯千鳥」(昭和27年)。

また、近江が終戦直後に大ヒットしたメロドラマ映画の主題歌から、水前寺と「誰か夢なき」(昭和22年)、笹と「愛の灯影」(昭和23年)、島倉と「悲しき竹笛」(昭和21年)をそれぞれデュエットするのも見もの。

”ディック・ミネ歌謡談義”は水原弘に近況を語ってもらう。ディックと水原は「或る雨の午後」をしみじみとデュエットする。

昭和50年1月27日

- ① 「決定版！盛り場艶歌」 # 174
② 森進一、都はるみ、水前寺清子
③ 「盛り場ブルース」(不明)、「銀座カンカン娘」(不明)、「流転」(不明)、「妻恋道中」(不明)、「一本刀土俵入り」(不明)
④ 森進一、都はるみ、水前寺清子と、今やアブラの乗り切った演歌の実力派三人が登場、戦前・戦後のヒット曲を歌いまくる。

特に、昨年、歌謡大賞、レコード大賞の”二冠王”となった森が、珍しい着流し姿で、股旅演歌を歌うのが見もの。

第一部は、戦後の盛り場風俗を盛り込んだ曲の特集。「盛り場ブルース」「銀座カンカン娘」ほか。

第二部は、股旅演歌の特集。「流転」「妻恋道中」ほか。

第三部“ディック・ミネ歌謡談義”では、都と水前寺の結婚談義。ディックが二人の結婚問題を追及。

昭和50年

昭和50年2月3日

①「美空ひばり激動の昭和50年！・その1・戦前戦中編」 #175

②美空ひばり

③「波浮の港」(美空)、「祇園小唄」(美空)、「酒は涙か溜息か」(美空)、「国境の町」(美空)、「明治一代女」(美空)、「上海ブルース」(美空)、「同期の桜」(美空)

④ 今週と来週の2回にわたり、美空ひばりの豪華なワンマンショーを送る。”昭和歌謡史五十年”をテーマに、昭和初期から現在までのヒット曲を、そのときどきの世相を写真やニュースフィルムで振り返りながら紹介していく。

今夜は”戦前戦中編”で、軍歌などをまじえて、17曲を美空が熱唱する。まず「波浮の港」(昭和3年)、「祇園小唄」(昭和5年)、「国境の町」(昭和9年)と、世相を反映した曲。続いて映画主題歌特集。

同年2月8日付読売新聞東京版朝刊に、「軍歌にむせび泣く」とのタイトルで視聴者(55歳会社員・女性)からの以下の投書が載っている。

NET三日夜「にっぽんの歌」を聞き、日本の歌のすばらしさを今さらのように感じました。美空ひばりの歌には心があり、最後の軍歌を聞きながら、むせび泣きました。歌のひとつひとつに思い出があり、ともすると忘れがちな時代のこと、戦死した友人のことなどが思い出されました。次回が楽しみです。

昭和50年2月10日

①「美空ひばり激動の昭和50年！・その2・戦後編」 #176

②美空ひばり

③「異国の丘」(美空)、「リンゴ追分」(美空)

④ 先週に引き続き、美空ひばりの歌で”昭和歌謡史五十年”を振り返る。今回は”戦後編”で、昭和21年から現在までのヒット曲を、当時の世相を写真やフィルムなどで紹介する。

「リンゴ追分」は、美空の代表作の一つ。昭和27年4月、東京・歌舞伎座での流行歌手初のワンマンショー用の新曲だったという。

昭和50年2月17日

①「艶歌！恋と涙の別れ唄」 #177

②フランク永井、青江三奈、野村真樹、ちあきなおみ、和田弘とマヒナスターズ

③「夜霧に消えたチャコ」(フランク)、「池袋の夜」(青江三奈)、「喝采」(ちあき)、「無情の夢」(野村・ちあき)、「君恋し」(青江・ちあき・フランク)、「泣かないで」(マヒナ)、「上海帰りのリル」(不明)、「花吹雪」(ちあき)、「神戸北ホテル」(青江)、「こんど逢えたら」(野村)

④ フランク永井、青江三奈、ちあきなおみ、野村真樹、和田弘とマヒナスターズといった”都会派”を集めて、男女の切ない別れをテーマにしたモダン演歌の数々を送る。

まず、フランクが「夜霧に消えたチャコ」(昭和34年)、青江が「池袋の夜」(昭和44年)、ちあきが「喝采」(昭和47年)とヒット曲を歌う。

続いて昭和初期の悲恋の歌を特集。野村とちあきで「無情の夢」(昭和10年)、青江、ちあき、フ

ランクで「君恋し」（昭和4年）など。曲にまつわるエピソードや時代背景などをディック・ミネが中心になって解説する。また、昭和30年代の歌を特集する。

新曲コーナーは、ちあきが「花吹雪」、青江が「神戸北ホテル」、野村が「こんど逢えたら」。

“ディック・ミネ歌謡談義”は、フランクのレパトリーの”大阪もの”を集める。

昭和50年2月24日

①「小野田寛郎こころの歌」 #178

②小野田寛郎、山口淑子、橋幸夫、舟木一夫、藤圭子、笹みどり

③「上海ブルース」（ディック）

④ ブラジル在住のため、一時日本に帰国している小野田寛郎と山口淑子を特別ゲストに迎える。

小野田が青春時代に愛唱したヒット曲の数々を、思い出話を交えながら送る。

中でも、小野田はディック・ミネの大ファンで、戦前のヒット曲は全部歌えるという。ディックが歌う「上海ブルース」のリズムに乗って、青春時代のあこがれの人だった”李香蘭”こと山口淑子をパートナーに、鮮やかなダンスを披露するのは見もの。

最後に、小野田がブラジル在住を前に、お別れのあいさつをする。

『週刊明星』昭和50年3月16日号にこの回の詳細なトークの様子が取り上げられている。

また、同年3月1日付読売新聞東京版朝刊に「印象的、こころの歌」と題する視聴者からの以下の投書が載っているが、同様の投書が5通届いたとのこと。

NETテレビ二十四日の「にっぽんの歌」（後9・00）の“小野田寛郎こころの歌”は大変楽しく見ることができた。青春時代の流行歌などなつかしい歌に聞きいる姿が印象的。司会の加東大介・河内桃子のさわやかムードがよくもりたてた。

昭和50年3月3日

①「大競演！任侠演歌決定版」 #179

②北島三郎、水前寺清子、五木ひろし

③「仁義」（北島三郎）、「東京流れ者」（水前寺清子）、「唐獅子牡丹」（五木ひろし）、
「兄弟仁義」（北島三郎）、「流転」（ディック）

④ 北島三郎、水前寺清子、五木ひろしの”演歌3エース”をゲストに迎え、男の歌、任侠の歌をたっぷり楽しませる趣向。病気休演の加東大介に代わり、レギュラーゲストのディック・ミネが河内桃子とともに司会を担当する。

北島の「仁義」を皮切りに、三人がそれぞれの生まれ故郷を織り込んだ自己紹介の”仁義”を切る。ついで水前寺が「東京流れ者」を、五木が「唐獅子牡丹」、北島が「兄弟仁義」と”任侠もの”を歌い、合間に”任侠もの”に対する考え方や歌う時の心境などを語り合う。このあと男の世界や心情を歌ったヒット曲を特集。

”ディック・ミネ歌謡談義”は、ディックが珍しく着流し姿で登場、三人の後輩に冷やかされながら、「流転」を歌う。

昭和50年

昭和50年3月10日

- ①「特集につぼんの歌アメリカ公演（前）」 #180
- ②田端義夫、青江三奈、村田英雄、舟木一夫、春日八郎、松山恵子
- ③「ふるさとの灯台」（不明）、「別れの一本杉」（不明）、「二人は若い」（ディック・青江）
- ④ 今週と来週の二回にわたり、「アメリカ・ロサンゼルス・シュライン・オーディトリウムで行われた”につぼんの歌アメリカ公演”の様相を録画中継する。

このアメリカ公演は、この番組がロサンゼルスやサンフランシスコなどでレギュラー番組として放送され、日系人の間で好評なので企画された。6500人収容の巨大な会場も満員の盛況さ。故国のメロディーを懐かしむ一世、二世たちが大部分。二、三時間離れたサンディエゴあたりから、バスを仕立てて繰り込んできた団体もある。本番が始まると「バタヤン!」「ハッチャン」などの声援が飛び交い、「ふるさとの灯台」や「別れの一本杉」などでは、懐かしさのあまり、ハンカチを目に当てる一世のお年寄りの姿も見られるほど。

ディック・ミネと青江三奈は、お熱いムードで「二人は若い」をデュエットして会場の日系人をわかせる。

なお、昭和49年11月11日付中日新聞夕刊に、この公開録画で歌手らと一緒にツアーするファンの募集記事が掲載されている。参加費用は20万6千円、定員は140人で、応募期限は同年12月31日となっている。『週刊明星』昭和50年3月16日号によると、同年2月23日に公開録画が行われた。

加東大介が司会から外れているが、その理由が病気によるものなのか、もともと計画時点から外れていたのかは不明。

昭和50年3月17日

- ①「特集につぼんの歌アメリカ公演（後）」 #181
- ②田端義夫、青江三奈、村田英雄、舟木一夫、春日八郎、松山恵子、榎本美佐江、大月みやこ
- ③「十三夜」（榎本美佐江）、「明治一代女」（榎本美佐江）、「黒田武士」（村田英雄）、「夜霧のブルース」（ディック）、「池袋の夜」（青江三奈）、「絶唱」（舟木一夫）、「お富さん」（春日八郎）、「王将」（村田英雄）、「大根月夜」（田端義夫）、「旅姿三人男」（ディック）、「東京音頭」（全員）
- ④ 先週に引き続き、アメリカ公演の後編を、ロサンゼルス・シュライン・オーディトリウムからの中継録画で送る。

第一部は、サンフランシスコの「金門公園」内にある日本庭園の様相をフィルムで紹介しながら、艶やかな着物姿の榎本美佐江が「十三夜」「明治一代女」、村田英雄が「黒田武士」など日本情緒いっぱいステージを展開する。

第二部は、哀愁をたたえた盛り場の歌を特集。ディック・ミネ「夜霧のブルース」、青江三奈「池袋の夜」など。

出演者のヒット曲集では、舟木一夫「絶唱」、春日八郎「お富さん」。最後に村田が「王将」、田端義夫が「大根月夜」、ディックが「旅姿三人男」。会場の熱気も最高潮というところで、出演者全員の「東京音頭」で華やかにフィナーレとなる。

昭和50年3月24日

- ①「歌祭り！花の饗宴」 #182
- ②春日八郎、水前寺清子、舟木一夫、青江三奈、都はるみ、ちあきなおみ、こまどり姉妹
- ③「名月赤城山」(不明)、「裏町人生」(不明)、「涙の渡り鳥」(不明)、「二人は若い」(ディック・河内)、「ラバウル小唄」(全員)
- ④ 三年半続いたこの番組も、今回でひとまず終わる。春日八郎、水前寺清子、都はるみ、青江三奈、ちあきなおみ、舟木一夫、こまどり姉妹を迎え、パーティー形式で進行する。過労から肝炎にかかり入院中の加東大介も病院からかけつけ司会を務めた。出演者から「早く元気になって！」と励まされ感激。

曲は、まず、これまで視聴者からのリクエストが多かった演歌を中心にジャンル別に紹介する。レギュラー・ゲストのディック・ミネは河内桃子とデュエットで「二人は若い」を歌う。

春日が「こういう番組がなくなるのは、ボクたちにとって寂しいことだなア」と、グラスを傾けながらつぶやいていたのは印象的。

フィナーレは、加東の全快を祈り、彼が戦争中、南の島で愛唱したという「ラバウル小唄」を全員で合唱。